

香川から広げる平和の輪

～杉原幸子氏からの人道プログラム、高松空襲からの探究活動を通して～



香川県立高松高等学校

高松高校人道プログラム実行委員会 2年 河野 真由子
烏谷 理希
栞原 茉依
大野 楓華
木村 琴春

【目次】

1. 人道プログラム・探究動機

2. 人道プログラムの活動報告

日本全国活動マップ

2022年度

- i. ホロコースト記念館訪問
- ii. 高松高校文化祭 パネル展示
- iii. 神戸ジューコム跡地訪問1
- iv. 名古屋研修
- v. 第1回 香川県内人道交流会
- vi. 神戸市役所訪問、神戸ジューコム跡地訪問2
- vii. 校内発表会（各クラスにて）
- viii. 岐阜・敦賀・神戸研修

2023年度

- ix. 第2回 香川県内人道交流会
- x. 地元中学生との交流会1
- xi. 地元中学生との交流会2
- xii. 西日本放送「さわやかラジオ」出演
- xiii. 東京研修

3. 高松空襲について・探究動機

4. 高松空襲についての活動報告

- i. 瓦町コンコースにて
- ii. 高松市平和記念館 訪問
- iii. アンケート 実施
- iv. 高松空襲語り部 戸祭恭子さんとの懇談
- v. 六角堂（高松市戦災犠牲者慰霊堂）訪問
- vi. 高松空襲について知る会

5. まとめ

6. 参考文献

1 【人道プログラム・探究動機】

2022年夏、本校の図書館で杉原千畝の奥様、杉原幸子氏の書籍を見つけた。そこには、幸子氏の直筆の私たちへのメッセージが書かれてあり、幸子氏が本校の卒業生であることを知った。最初は、千畝氏がユダヤ難民のためにビザを発行した人ということは知っていたが、それぐらいの知識しかなかった。その後、本校で世界史を担当している三崎先生が第二次世界大戦中の各国の情勢及びユダヤ難民の状況を教えてくださり、杉原夫妻が行ったことに大変興味を持つようになった。そこで私たちはより深くユダヤ難民や杉原夫妻のことを探究することにした。関係する書籍を読んだり、『杉原千畝』という映画を見たりして調べていくうちに、当時の世界の流れに逆らってビザを発給した千畝氏の強さに感銘を受けた。また、極限状態の千畝氏をそばで支え続けた幸子氏の後輩であることを大変誇りに思うようになった。

しかしながら、友達と話をしていても幸子氏のことや千畝氏がしたことを知らない人がほとんどであったため、彼らの功績を伝えていきたいと強く思うようになった。そこで実際に杉原夫妻やユダヤ難民にゆかりのある地を訪問し、実体験を通して学びを深めることで学んできたことを多くの人たちに伝えられると思い、行動に移していった。

2 【人道プログラムの活動報告】



高津区 HP 参照

①～⑤は実際に私たちが訪問した場所であり、事項にそれぞれの説明がある。

～2022年度～

i. ホロコースト記念館訪問 ① 8月3日

理事長である大塚信さんがホロコーストの悲惨な歴史やアンネ・フランクの父であるオットー・フランクさんに偶然出会った時のことについてお話していただきました。

また、館内にはアンネの隠れていた部屋の再現や犠牲になった子どもたちを象徴する「子どものくつ」が展示されていた。ホロコーストという残酷な事実について知り、より一層学ばなければならないと思った。この時、館内をガイドしていただいた大塚理事長の奥様が本校の卒業生であることを知り、ここでもご縁を感じ、幸子氏から続く「平和」の大切さを求める流れに私たちも身を寄せているような感覚を得ることができた。



ii. 高松高校文化祭 パネル展示 9月10,11日

ホロコースト記念館で学んだことを友人たち、あるいは香川県の人達に伝えていくことが大切だと思い、文化祭を人々に伝える機会とした。一人一人が感じたことをレポートに書き展示すると同時に、テーマをそれぞれ決めて模造紙などに書いて展示した。ホロコーストのような悲劇は二度とあってはならない。ホロコースト記念館で学んだ「平和」への想いを展示という形で多くの人に伝えることができた。

また、この文化祭の時も人と繋がり、伝わっていくことのご縁を感じることになる。私たちがユダヤ人のことを学んでいるということを知ったイスラエル大使館からご連絡をいただいた。イェルサレムのヤド・ヴァシェム博物館(ホロコースト博物館)主催で、日本国内で「空のない星～ホロコーストの子供たち～」というパネル展を巡回展示しており、その展示会を日本の高校では初めて高松高校でやってもらえないかという依頼があった。杉原幸子氏の繋がり「平和」について学びたいという私たちの想いの中でこのようなご縁にあずかれましたと感謝の気持ちで一杯になった。

早速プロジェクトチームを発足し、ホロコースト記念館とは別の展示会場を設け、役割分担を決め、パネル展示を行った。本校生のみならず、多くの来場者の方々にもパネル展を見て頂き「平和」について色々と考える機会を創出できたと思う。

文化祭後、本校だけの展示にとどめておくのは惜しいと思い、近くにあるアイパル香川(香川国際交流会館)にもアポイントメントを取り展示のお願いに行った。急なお願いにもかかわらず主旨をご理解くださり、1週間という短い期間ではあったもののアイパル香川においてもパネル展示を運営、企画することができ、私たち自身大変貴重な経験となった。



iii. 神戸ジュークム跡地訪問 1 ② 10月7日

神戸に避難してきたユダヤ難民救済活動拠点であった「神戸ジュークム（神戸ユダヤ共同体）」跡地を訪問した。当時杉原ビザを受け取り、逃げてきたユダヤ難民へ食料、住居、渡航などの情報を提供した場所である。現在そこには当時からある石垣が残っている。また、神戸市内の様々なところでユダヤ難民と神戸市民の温かい交流が生まれていたというお話も聞くことができた。同じ日本人として誇らしく思うと同時に、第二次世界大戦中の苦しい生活の中でも他を思いやる「人道」の心に感銘を受けた。



産経新聞 10月8日付

iv. 名古屋研修 ③ 12月26~27日

・愛知県立瑞陵高校生との交流

千畝氏の母校である愛知県立瑞陵高校を訪問し、ディスカッションなどを通して交流した。まず、瑞陵高校生に学校の前にある「センボ・スギハラ・メモリアル」を案内してもらった。その後、「もし、自分が千畝氏と同じ立場だったらどうするか」というテーマでディスカッションをした。自分たちと同世代の人たちとホロコーストについて話し合うことができ、とても充実した時間となった。香川県と愛知県の高校生が幸子氏と千畝氏のご縁でつながることができ、互いの県の文化や風土についても話し合う。「平和」を学ぶ交流会ではあるものの、それぞれの地域の方言やものの考え方にも触れることができ視野が広がった。香川のうどんを持参し、名古屋のういろうと交換して互いに笑顔あふれる会に終わった。香川県と愛知県、離れてはいても共通のテーマで深く学びあっており、今後もこの交流は続いていくと感じた。



・「人道の道」フィールドワーク

千畝氏にゆかりのある名古屋市内の6スポットを回った。各スポットには、その場所にまつわる千畝氏のエピソードが書かれた銘板があり、そこで記事を読み、その前で写真を撮るなど、楽しみながら回ることができた。外交官になる前の千畝氏の一面を見ることができたような気がした。また、千畝氏の名古屋での生活の様子を垣間見ることができた。



・名古屋市立瑞穂ヶ丘中学生との交流

瑞陵高校の程近くにある瑞穂ヶ丘中学校の生徒会の皆さんと交流した。瑞穂ヶ丘中学校が昔の第五中学校であり、ここに杉原千畝氏は当時通っていた。玄関からスロープに至る道筋は当時のままであり、千畝氏の銅像も立っており、当時を偲ぶことができた。中学生は私たちのために様々な準備をしてくれており、当日は互いの学校紹介、瑞穂ヶ丘中学校の活動報告を伺った。ウクライナからの避難民の方を迎えて交流会を行ったりして、中学生でありながら自分から問題意識を持ち、行動に移していて大変刺激をもらった。私たちが負けないよう精力的に活動していかなければと心を新たにしました。



v. 第1回 香川県内人道交流会 1月21日

本校生40名、近隣の高松商業高校生5名、高松工芸高校生7名の生徒を集めて交流会を開いた。これまでの活動報告及び名古屋研修と同じテーマで互いにディスカッションをした。これほど多くの生徒が参加してくれるとは考えていなかったのが驚きと同時に、多くの人が幸子氏などに興味を持ってきていることに喜びを感じた。今まで同じ高校出身の幸子氏について、私たちを含め、あまりにも知らなかったと思う。ディスカッションではテーマに対して皆真剣に当時の千畝氏の立場に立って考えた。また話し合う中で「千畝氏がビザを発行できたのは、幸子氏が苦悩している夫をずっとそばで支え続けたからではないか」という意見が印象に残っている。今まで事実として知っていたことだが、交流することで多方面から新たな見方を見つけることができ爽やかな会であった。今まで杉原夫妻の事は知らなかったがこの会で興味を持った、研修にも参加したい、という声を多く聞きやりがいを感じた。「人道」、「平和」について考える輪が更に広がったように思う。ここで一緒にディスカッションをして交流した人たちが、自分の身の回りの人に伝えてくれる。あるいは高松商業高校、高松工芸高校においても「平和」について深く考える機会が広がっていく。私たちの未来は私たち自身が切り開いていく。その未来に「戦争」という悲劇が起こってはならないと強く感じた。



vi. 神戸市役所訪問、神戸ジューコム跡地訪問 ② 2月12日

初めて神戸を訪問する人を多く含み2度目の神戸訪問を行った。神戸市文書館館長の谷口真澄さんに当時のユダヤ難民と神戸市民の交流について講演していただいた。千畝氏がビザを発給し、そこから多くの人によって「命のバトン」が繋がれたのだと改めて感じた。神戸ジューコム跡地の訪問は2回目だったが、前回よりも知識が増えたこともあり、ユダヤ難民が命がけで長い時間をかけ、やっとの思いで神戸にたどり着いたのだと身をもって感じた。



vii. 校内発表会(各クラスにて) 2月半ば

各クラスで、今までの研修の報告、および杉原夫妻に関する特別授業を行った。講師役は研修に参加して学んできた私たちである。ビデオ、プレゼンテーション等を用いてホロコーストや杉原夫妻の功績を伝えたり、5人ほどのグループを作ってテーマを決めて話し合ったりするなど、様々な工夫が見られた。この活動を通して、我が校の先輩である幸子氏のことをより多くの生徒と共有することができ、伝承の輪が広がった。この活動は、次年度につながる活動であり、多くの人たちと「平和」について真剣に考えることができた。



viii. 岐阜・敦賀・神戸研修 ④ 3月19~20日

・杉原千畝記念館（岐阜県八百津町）

千畝氏の生まれ故郷を訪問した。とても緑豊かで空気のおいしいところだった。やはり実際に訪問してみると、歴史の一場面にも自分も存在しているような気になる。館長の山田和実さんのお話を聞いた後、館内を見学した。特に、千畝氏が通ったハルピン学院の校訓である「人のお世話にならぬよう 人のお世話をしよう そして報いを求めぬよう」という言葉が心に残った。この言葉を心に留めながら、生活していきたい。八百津町長も来てくださり、私たちを歓迎してくださった。

そして、記念館を出た時に偶然、イスラエルから来た団体の方々とお会いすることができた。この人たちは自分たちのルーツを確認するために日本を訪れ、岐阜の緑豊かな杉原千畝記念館を目指してやってきた。彼らには千畝氏への尊敬の念と感謝の気持ちが今なお伝わっているのだと強く感じた。短い時間だったが、英語でお話をしたり、一緒に写真を撮ったり、楽しい時間を過ごすことができた。



・敦賀高校創生部の方々との交流

ムゼウムの訪問後には港から駅までの道のりを敦賀高校の生徒と歩いた。その道のりは当時のユダヤ難民が歩いた道でもあり、そこを県は違っても同じテーマで学びを深めている者同士が歩いて互いの文化などについて話し合うことができた。ここでも友情をはぐくむことができ、その繋がりは今でも続いている。敦賀市でも神戸市と同じように、現地の人たちが戦争中の苦しい生活状況の中、りんごを提供したり、お風呂に招待したりするなど温かい交流があったことを知ることができた。敦賀駅に着いた頃にはすっかり打ち解けていた。創生部と人道プログラム。遠く離れた土地でも取り組みを共有し、交流できたことはお互いにとって良い経験になったと思う。次は敦賀高校創生部の方々を香川にお呼びして私たちの地域の文化を伝えたい。



・神戸ジューコム跡地訪問3 ②

この岐阜・敦賀・神戸研修では、日本に逃げてきたユダヤ難民が実際に通った道のりを私たちもバスで移動した。とても長い道のりだった。バスを降りて最後の坂を上って神戸ジューコム跡地にたどり着いた時は、安心して嬉しかったことを覚えている。命がけて長い道のりを経て、神戸にたどり着いたユダヤ難民は私たちが想像できないぐらいに安心し、嬉しかったのではないかと思う。やはりこれも現地研修を通して得られる醍醐味だと思った。

・神戸市長表敬訪問

神戸市長を表敬訪問させていただいた。お忙しい中、私たちを温かく迎えてくださった。そして、第二次世界大戦の神戸市民とユダヤ難民の交流についてのお話だけでなく、現在の神戸市や市長の仕事についてなど、普段聞けないような貴重なお話をたくさん伺うことができた。

研修を通して会う人たちには共通項がある。皆さん私たちにメッセージをくださっている。よりよい将来の構築であったり、平和な日本、平和な国際社会であったり、テーマは様々であるが、全てが私たちにとって財産であり、それをきちんと伝承していかなければいけないと思う。また様々な場所でインプットできたことを香川に帰って同級生や地域の人たちに伝えていくことも私たちの使命だと改めて感じるようになった。

幸子氏の後輩として始まったあっという間の密度の濃い半年であった。出会った多くの人たちにここでお礼を申し上げたい。



～2023年度～

ix. 第2回 香川県内人道交流会 7月5日

新しい年度が始まり、新入生に対して私たちが伝承していく機会となった。1年生42名と高松工芸高校生7名を対象に杉原夫妻の功績を伝えた。私たちが昨年訪れた、神戸ジューコムに1年生と高松工芸高校の生徒が行くにあたって、学ぶための導入となる研修会である。そして、「ウクライナ侵攻が続く今の世の中で私たちが出来ることは何か」というテーマでディスカッションを行った。これまで研修に行き、フィールドワークによって学んだ高松高校の2年生が1年生にその学びを伝える。そして、湧き起こってきた「平和」への思いを伝承するという初の試みであった。そして、引き続き他校の高校生にも伝承するための交流としての意味も持っていた。

どうすればこの研修に興味を持ってもらえるのか。後々の伝承者、とっては仰々しいかもしれないが、彼らがこれから私たちと共に学び、伝えていく立場となるために、私たちの熱意を精一杯伝える努力をした。頷きながら真剣に聞いてくれる様子を見て、「伝承」を少しでも実行できたような気がして胸が一杯になった。

その後、交流を行った49名は7月9日に神戸ジューコム跡地へ向かい、現地で学びを広げてきた。



四国新聞7月6日付

x. 地元中学生との交流会 1 7月26日

中学生の時の恩師の先生が東かがわ市立白鳥中学校で教頭先生をされていることを聞いており、4月から交流会の打診をしていた。また企画者の1人が東かがわ市出身というのも縁を感じた理由である。そしてその交流会が Teams で実現したのがこの日であった。

初めて自分が学んできたことを中学生に伝える機会であった。最初こそ緊張はあったものの、私たちが用意した動画もしっかり見てくれて、その後の質疑応答、自由なやり取りにおいてもたくさん質問をしてくれた。人に尋ねられることがこんなに楽しいものか。自分が続けてきた学びが一つの形になったような気がした。

最後には別れが惜しくなるくらい中学生が手を振ってくれて、思い切って今回の企画に挑戦してみて本当によかったと思えた。

今後も「平和」の輪を広げていきたい。



xi. 地元中学生との交流会 2 7月27日

この日、高松市立一宮中学校との交流会にのぞんだ。母校の先生が現在勤務されている中学校で、今回の私たちからの申し出も快く引き受けてくださった。テーマは「杉原夫妻から学ぶ『平和』の意味」。ビデオ映像と模造紙に書いたまとめ資料を使って、わかりやすく中学生に伝えられるよう心掛けた。中学3年生の6名の生徒と、隣の中学校の2年生1名、計7名の生徒が参加してくれた。途中で3人組と4人組に分かれてテーマを決めて話し合う時間も作り、交流を図ることができた。

教えたり伝えたりするはずが、逆に中学生からの発言にハッとさせられたり、私たちの中のない新しい発想なども聞くことができ、とても新鮮で、新しい学びや発見につなげることができた。参加してくれた中学生、企画を快く引き受けてくださった校長先生をはじめ、恩師の先生に感謝したい。今後もこの経験をいかして、「平和」の輪を広げていきたい。

今回の活動がテレビのニュースや新聞でも報道され、多くの人から声をかけられた。自覚と責任を持って、今後の活動にも積極的に取り組んでいきたい。



読売新聞 8月13日付

xii. 西日本放送「さわやかラジオ」出演 8月2日

四国地方 ESD 活動支援センターの宇賀神幸恵さんと西日本放送「さわやかラジオ」に出演させてい

ただいた。主に、今までの人道プログラム活動の中で学んできたことについてお話させていただいた。自分たちが行っている活動についてラジオを通して多くの人に発信することができた。とても貴重な経験となり、これからも「平和」の輪を広げていきたいと思った。



xiii. 東京研修 ⑤ 8月21～23日

・早稲田大学

早稲田大学は千畝氏が通っていた大学である。まず、千畝氏の大学時代を思い描きながら大学内を散策する。教育学部の前に千畝氏の顕彰碑があり、早稲田大学の千畝氏に対する尊敬の念を感じることができた。また大学内の歴史館も見学させていただき、そこには千畝氏の「外交官としてではなく、人間として当然の正しい決断をした」という言葉を見つけることができた。

会議室に場所を移し、オペラ『人道の桜』で杉原幸子役を演じた歌手の新南田ゆりさんが私たちのためにお話ししてくださった。新南田さんが幸子氏のことを「冷静で、賢く、優しく、大らか」と形容していた事が心に残っている。

その後、アフガニスタン難民について学んだ。はじめに桐本裕子弁護士が現在のアフガニスタン及びアフガニスタン難民の状況について説明してくださった。その後、アフガニスタン難民のロキア・アジジさんが日本に来た経緯、道のり、来日後の生活についてお話ししてくださった。自身も政府軍の病院で働いていたことからタリバンから脅迫状を送られたこと、同僚の安否も全く分からないことなど、ニュースを見るだけでは分からない一個人としての生の経験を伺えたことは大変貴重で、また物事を深く考えるきっかけとなった。また、通訳をしてくださったユノスさんが、自身の30年前アフガニスタンで体験した紛争の事を思い出して涙を流された。その時紛争が人々に与える傷の深さを感じ心が痛くなった。

最後に2つのテーマでディスカッションをした。1つ目は「自分がアフガニスタン領事ならどういう人にビザを出すか」、2つ目は「日本で難民の方々が過ごしやすくするために今日本に求められていることはなにか」。皆、自分事として真剣に考え様々な意見や発想が生まれていた。お互いの意見を聞き、世界が広がった。





・イスラエル大使館表敬訪問

まず広報官の方がイスラエルの基本情報や国の成り立ちについて説明してくださいました。その後、ブロムベルグ参事官がご自身の家族に起こった悲惨な出来事や、ヤド・ヴァシェムの意味についてお話ししてくださいました。ホロコーストは決して遠い過去の話ではないと強く感じる事ができました。

今回大使から直接お話を伺うことはできなかったが、大使公邸の中を実際に見て回ったり、入るときセキュリティの厳しさを体験したりすることができ、イスラエルという国の実情を知ることができた。香川に住んでいて、駐日大使館を訪問することはなかなかない。とても貴重な機会であり、今まで学んできたことを違う視点から考えさせられる機会となった。



〈イスラエル大使館 Instagram より抜粋〉

・日本イスラエル親善協会（JIFA）との交流

3人のイスラエルからの留学生を招いて座談会をした。イスラエルの教育でホロコーストが占める割合の大きさ、イスラエルでよく使われるスラングなど若者同士のざっくばらんな交流でしか得られないことを多く知ることができた。私たちが思っていたイスラエルのイメージが良い意味で崩されたようで、地理的には遠い国であるが親近感を覚えた。



・俳優 山田純大さんとの座談会

純大さんは、杉原ビザを受け取ったユダヤ難民が神戸に到着した際にユダヤ難民たちの住居、食料、滞

在期間の延長など生活全般を助けた人物である小辻節三氏を20年以上研究されている。純大さんの小辻氏の研究に対する情熱に圧倒された。そこには小辻氏のユダヤ難民救済の熱い想いに通じるものを感じた。最後には自分の悩みを相談する生徒もおり、純大さんはどのような質問にも1つ1つ丁寧に答えてくださった。

今回非常にお忙しい中私たちのために時間をとってくださり話ができたととても光栄に思う。「平和」を考える活動の輪が多くの人との出会いによって広がり、私たちが成長できているのを感じる。



・外務省訪問

千畝氏は外交官としてリトアニアで自分の判断でビザを発行した。帰国後、外務省からは退職勧告を受けた。それは中央省庁の意向に反して行ったリトアニアでの活動の責任を取らされたという見解もある

が、戦後の人員整理の対象であったとも言われている。どちらにしても外務省を退職した杉原夫妻はその後、実の子供の死や幸子氏の妹の死に直面しながら戦後の苦しい状況を必死に生きたようである。

現在外務省に勤務される、同じ香川県出身の2人の職員の方々が私たちを迎えてくださった。香川の高校生が来ると聞いて対応に手を挙げてくださったそうだ。幸子氏と同じく、ここにも地元の温かい繋がりを感じ、嬉しくなった。お話では外務省に入省するまでの経緯や仕事の内容などを教えてくださった。その後、質疑応答の時間があったのだが、皆とても興味がある様子で様々な質問が出ていた。

最後に同じ外務省に勤務した千畝氏についてどう思うか尋ねてみた。お2人とも外務省の訓令に背いた千畝氏の行動については明確には答えてくれなかったが、千畝氏のことは本当によく知っており一目を置いているようであった。また、2人のうち1人の職員は本校を卒業された女性の方であり、その方も私たちと同じように幸子氏の後輩であることを誇りに思われていた。お2人の話は外務省に対する新しい見方を与えてくださった。今後、国際情勢等に関して、何かの外交の動きの後ろにはお2人のような外交官の存在がいることを、現実感をもって感じるようになるだろう。



3 【高松空襲について・探究動機】

私たちは幸子氏の後輩として「人道プログラム」を立ち上げ、現地でのフィールドワークを通して帰県してから周囲に伝える活動を行ってきた。この活動によって「平和」に関する多くの知識を吸収でき、

ディスカッションや出会いを経て、より深く「平和」について研究、考察をできるようになった。

しかし、私たちは地元である香川県のことをどれだけ知っているのだろうか、香川でも戦争の被害があったのに、と立ち止まって考えるようになった。小学生の時に学校で高松空襲のことは聞いたことがあった。私たちが不自由なく生活しているこの高松においても戦争で多くの罪のない人たちが犠牲にあい、多くの悲劇があったはずだが、私たちはその事実を詳しく知らない。その上、戦後78年が経ち、そのことを知っている人がますます減っている。そういった史実や当時の人たちの想いが今に伝承されていっているのか。そのような想いが地元香川、地元高松の空襲について探究するきっかけとなった。



4 【高松空襲についての活動報告】

i. 瓦町コンコースにて

琴平電鉄（ことでん）瓦町駅の改札前のコンコースで、「第33回高松市戦争遺品展」が行われていた。そこでは、高松空襲に関する資料や遺品が展示されていた。通学途中で目に入り、見ることにした。

【高松空襲の基本情報】

- ・爆撃機数
B29爆撃機 116機（うち案内機 12機）
- ・空襲時間
7月4日午前2時56分から4時42分まで（106分間）
- ・投下爆弾
通常爆弾 24トン、焼夷弾 809トン
- ・被害面積
3.85平方キロメートル（市街地の約80%）
- ・被害建築物
18,913戸（うち住宅 16,418戸）
全焼 18,505戸（うち住宅 16,108戸）
半焼 408戸（うち住宅 310戸）
- ・罹災者 86,400人
- ・死者 1,359人
- ・負傷者 1,034人
- ・行方不明者 186人



↑被害面積。
「第33回高松市戦争遺品展」
より

<https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/shinotorikumi/jinken/keihatsu/heiwa/index.html> 「高松市公式ホームページ」より

まず、高松空襲についての情報（爆撃機のルートや、被害状況など）を詳しく知ることができた。遺族の方が展示した遺品も数多くあった。学校の軍事教練で使われていた手旗は使いこんだ跡があり、一度破れたところは継ぎ接ぎしている。当時の貧しさを感じるとともに、戦争に向かう中で、必死に戦いに備えていた高松市民の当時の様子が想像できた。

写真に写る瓦礫の山。爆弾で壊滅状態になった町。しかし、これまでの人道プログラムで見てきた展示とは違った衝撃があった。それは、瓦礫と化していたのが私たちの見慣れた町であったからだった。平たい形をした屋島や通学でよく見る道の形は残ったまま。でも家屋はもはや原形をとどめていない高松市内の様子に、ショックを受けた。空襲の悲劇が、今踏みしめている高松の地で起こっていたという事実を突きつけられた。

もし、高松で空襲が今起こったら。

町と共に、今ある私たちの希望、夢、目標も潰されてしまうに違いない。このことは、決して他人事ではないと強く感じた。



ii. 高松市平和記念館 訪問

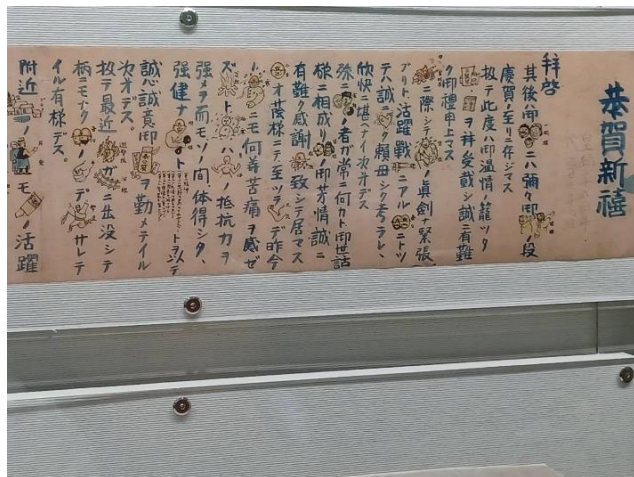
高松空襲についてもっと知りたい、知らなければならないという思いが膨らみ、後日高松こども未来館

にある高松市平和記念館に行った。そこでは、「実際に戦時下で人々が着ていた服」など貴重な実物が展示されており、当時の状況を想起させられるような様々な展示の工夫が施されていた。「第33回高松市戦争遺品展」の展示と同様に、戦場に向かうため日々訓練に励む人々の様子が頭に浮かんだ。そして終戦が近づくとつれ、食料も減り、それでも空襲警報が鳴り響く中、逃げ回るしかなかった人々。空襲で逼迫し困窮した状況が伝わってきた。

また、実際に高松空襲を経験された方々のビデオも数多くあった。その中には本校のグラウンドに爆弾が落ちたという当時の記憶を語る人もいらっしやった。私たちの高校にも爆弾が落ち、それに当たって亡くなった人がいたことを初めて知り、ぞっとした。

現在、空襲を体験したことのある人も高齢になっており、後世に空襲を伝える人が少なくなっているようだ。「自分たちは人道プログラムの活動の中で世界規模のことは学んできたのに、地元のことは何も知らなかった。」「この人道プログラムで、このことを代わりに伝えていくことはできないのだろうか?」「香川県の住民として高松空襲についてもっと知らなければいけないし、その貴重なインプットはアウトプットに繋げていかななくてはならない。」そう話し合った。





高松市平和記念館にて

iii. アンケート 実施

「高松空襲のことを、香川県の人々はどれくらい知っているのか。」

「同世代の高校生たちの高松空襲の認識は私たちと同じようなものだろうか。」
 これらについて知りたかったので、高松高校の1・2年生を対象にアンケートを実施することにした。

1 学年（アンケートに回答してくださった総数 計338人）

● 高校1年	143
● 高校2年	195



2 あなたは高松空襲について知っていますか。

● 聞いたことがあり、内容も知っている。	164
● 聞いたことはあるが、内容は知らない。	146
● 聞いたことがない。	29



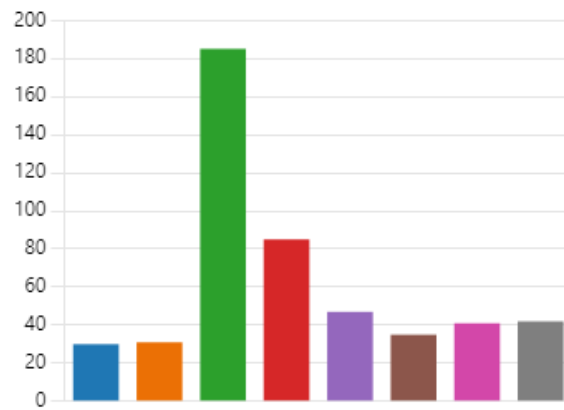
3 高松空襲をいつ知りましたか。

● 就学前	2
● 小学生	231
● 中学生	75
● 高校生	2



4 高松空襲をどのように知りましたか。

● 父母から聞いた	30
● 祖父母から聞いた	31
● 先生から聞いた	185
● 空襲の経験者や語り部の方から教...	85
● 本で読んだ	47
● インターネットで知った	35
● メディアで知った	41
● その他	42



5 高松空襲のどんな内容を知っていますか。



6 これからあなたは、高松空襲について新しく知りたい、もっと知りたいと思いますか。

● はい	253
● いいえ	86



7 これからあなたが高松空襲について知るために、具体的にどんな方法を利用しようと思いますか。

175回答者 (52%) この質問に インターネット回答しました。



ほとんどの人は高松空襲について聞いたことがあると答えたが、内容が浅薄な人が多かった。その理由となるのが「高松空襲」との出会いの時期と思われる。

知っていると言った人は、「先生から聞いた」、つまり学校で学んだ人が多いようだ。しかも小学校で学んだという人が全体の約4分の3である。高松市の小学生は高松こども未来館で必ず学習するため、高松空襲について学ぶ機会があった。また高学年で平和学習にも取り組むことからその時の学習の記憶が残っているのではないと思われる。それだけに、「知っている」内容が小学生の年齢程度で理解できる内容に絞られるのではないか。

そして、アンケートに答えた人の4分の3は、これから高松空襲について知りたいと思っているという結果だった。

アンケートの結果から、生徒は改めてもっと深く知りたいと思っているが、学ぶ機会や場所が足りていないのかもしれない、と思った。ネット上の情報は手軽にしかも大量の情報を得られるので有効である。物事を知る方法としては最も頻繁に利用されるようになったが、私たちは人道プログラムの学習の過程で「生の声を聴くことが自分事として捉えられ、その問題についてより真剣に考えられるようになる」ことを学んだ。

だからこそ高校生をはじめ人々が生の声から学べる場を作りたい。人が興味を持ち、正しい知識を知るだけでなく自分事として捉えることができるように、本当の「生々しい高松空襲」を知る方のお話を聞いてみたいと思うようになった。

iv. 高松空襲語り部 戸祭恭子さんとの懇談

7月27日、実際の高松空襲を知る語り部の戸祭恭子さんにお話をさせていただく機会を頂いた。私たちが戸祭さんのところに向いてお話を伺う予定であったが、戸祭さんは本校にわざわざ来てくださることになった。後で分かったことだが、戸祭さんも本校出身とのことであった。本校在籍中に空襲に遭い、学校に通えなくなり香川西部の丸亀市にある高校に転校してしまったとのこと。高松高等女学校での卒業は空襲のために叶わなかったことなどもお話しして下さった。

戸祭さんは高松空襲時、焼夷弾が降ってくる中で市街地を逃げ回るという経験をされたそうだ。その中で市内中心部にある栗林公園でのお話が鮮烈に印象に残っている。

戸祭さんは逃げている最中に1組の親子に出会う。2人はうずくまっている様子で、母親の腕の中の幼い赤子は懸命に母親に縋り付き乳を求め泣いていた。戸祭さんが母親に早く逃げるよう声をかけようと近づいた。そのとき、その母親にはもう息がないことに気付いたのだ。「母親なしでこれからこの子はどうなるのだろう」と苦しさ、やりきれなさがこみあげてきたが、当時女学生であった戸祭さんは火の手が迫ってくる中、何もすることができず走ってその場を立ち去った、というお話だ。戸祭さんは今でも「その子が生きていれば今何歳くらいだろう」と考えることがあると言う。私たちと同年代で死と隣り合わせになるような経験は私たちの想像を絶するほど恐ろしかっただろう。また、今の私たちよりずっと若い年齢で空襲を経験し命を落とした子供たちも大勢いる。

空襲時、焼夷弾が落ち続ける中で人々は栗林公園に逃げようとしたようだ。その時、周りにいる人と『栗林公園で会いましょう』という合言葉とともに約束を交わした。必死に逃げて、やっとのことで到着したが、多くの人々が集まったその栗林公園に焼夷弾が落ちた。人がたくさん集まっていたため、標的にされたのだ。そして、そこにいた全員が亡くなったそうだ。

戸祭さんが一つ一つ紡ぎだす言葉に表れるあまりに生々しい実話の数々。戸祭さんも高松空襲の記憶を辛くて思い出したくはないとおっしゃっていたが、それでも空襲を経験したことのない私たちのために伝承し続けなさっている。

高松空襲を経験されたその後、戸祭さんは大人になり人々と話す中で、高松の人たちが空襲の話をしたがらず、忘れようとしていることに気づいたそうだ。そのことに危機感を持ち、高松空襲の実情を改めて詳しく学び、今まで語り部としての活動をされてきた。また高松空襲を後世に伝えていくため、高松空襲を記録した書籍の制作にも携った方である。気さくでとても優しく、生徒のたくさんの質問にも快く丁寧に答えて下さった。



↑ 戸祭恭子さんとの懇談

下記は懇談を終えての生徒の感想である。

今回、語り部の戸祭さんのお話を伺って、2つのことが心に残っている。

1つ目は、「親切にしてもらったら次の人に返す。」ということである。戦時下でみんなが苦しい生活を送っていた中、親切にしてもらったら、相手の御恩は感謝して素直に受けるということ。そして次の人にその親切をつなげていくというお話が印象に残った。

2つ目は命の大切さである。戸祭さんは、「とにかく生きてかった。」とおっしゃっていた。今の私たちの生活は普通ではなく、感謝すべきものなのだ、と改めて感じた。(大野)

戸祭さんのお話の中に出てくる地名が聞いたことのあるものばかりだったため、改めて高松空襲が私たちの地元で起こったということを実感した。自分がいつも通学路として歩いている道が当時は火の海だったということを知り、想像するだけで寒気がした。また、戦時中、戸祭さんの住む地域で子供たちのためにカレーライスやコッペパンを作って配っている理科の先生がいたという話を聞いた。自身が生きていくだけで精一杯な時になぜ人に親切にできるのかと驚いた。

「災害と違って、戦争のことはみな忘れようとしている。」と戸祭さんはおっしゃった。自分の住んでいる街なのに、実際、高松空襲について詳しく知っている人は少ない。「戦争を知らない子供たち」という歌があるが、今の時代、戦争を知らない大人たちもたくさんいる。それは今の世の中が平和であることの比喻であり、良いことなのかもしれないが、このまま負の歴史として蓋をしてしまっはいけないと思う。(河野)

今まで人道プログラムでは杉原夫妻について学んできたが、戸祭さんがおっしゃった、高松空襲下で子供たちに食べ物を分け与える先生のことなどをお聞きした中で、杉原夫妻と重なる部分があると感じた。それは、人間愛を持ちそれを行動に移す力である。この力は歴史上の偉人にだけ備わっているものではないに違いない。千畝氏は外交官としてユダヤ人のために尽力した。だがその一方で、時間も場所も全く異なる地元・高松の名もなき人もまた、全く同じ人間愛をもち、それを行動で示したのだった。親切心や人を助けたいという共通の人間愛が、それぞれの生活の範囲の中で発揮されていたのである。私たち高校生もまだ名もなき人々ではあるが、幸子氏や人道プログラム、戸祭さんとの懇談を通して学んだことを広め伝えていく中で、人間愛を発揮していかななくてはならない。一人の人間として責任をもち、行動していくこと。それがどんなに大切かということに気付かされた。幸子氏や人道プログラム、戸祭さんから知らされた衝撃や得た学びを、今後、誰にどのように発信していくか。私たちの活動への熱意と創造は、膨らむばかりである。



←四国新聞 8月6日付

v. 六角堂（高松市戦災犠牲者慰霊堂）訪問

戸祭さんとの懇談を終えて数日経った後、香川県高松市中野町にある高松市戦災犠牲者慰霊堂、通称六角堂を訪れた。住宅が立ち並ぶ中、ぽつんと建てられている質素な建物であるのだが、階段を登って中に入ると異様な雰囲気包まれた。汗が冷えて少し身震いがするほど涼しく、公園や民家に囲まれているはずなのにそこだけしんと静まり返っていた。

中には六角の屋根をした慰霊堂と、高松空襲で爆撃を受けて亡くなった方々1359名の内、1259名の名前が彫られた慰霊碑が建てられている。慰霊碑を前にするとこれほど沢山の人が一夜にして亡くなってしまったことに驚き、改めて戦争の悲惨さを感じた。

7月4日は高松空襲が起こった日。毎年この日には追悼式があり、六角堂が犠牲者の遺族の方々にいっぴいになる。私も家族が戦争で亡くなってしまおうと想像しただけで胸が痛くなった。ましてや、自分の目の前で大切な人が亡くなってしまったらトラウマとなり、一生その光景が心に残り続けるだろう。また、戸祭さんのお話の中で「親が死んで子供はどうにも出来ない」という言葉があった。今の時代であれば助けてくれる大人は周りに沢山いるだろうが、当時は自分が生きるだけでも精一杯。そんな時代に戦争孤児となってしまった子供たちはどうなってしまったのだろうか。

六角堂の前に置かれている建設由来記の文中には『よい戦争はない、悪い平和はない』という言葉がある。いつの時代にも正義の戦争は存在せず、今の平和な世の中は沢山の犠牲の上に立っているのだろうと感じた。そして私たちは、その現状に満足して平和な生活が当たり前だと考えるのではなく、過去の歴史に学び、未来へ伝えていきたい。



六角堂（高松市戦災犠牲者慰霊堂）にて

vi. 高松空襲について知る会

その後、高松空襲への理解が深まった私たちは、それを周りに「伝承」する計画を本格的に練っていった。高松空襲はいわば「ローカル」で、現在は学校以外で学ぶ機会も少ないため、強い印象が他の人に残せるのか不安だった。しかし、高松空襲を体験した人の生の声に強く心を動かされたからこそ、人々が生の声から学べる場にしたいと考えた。

こんなに伝えたい思いがあっても、それがどうすれば他の人に伝わるだろうか。

そこで、この2年間人道プログラムでお会いしてきた人々との交流を参考にした。研修で知識と共に新たな感情を与えてくださった、専門家の方の資料の使い方や言葉の選び方にも学べるところがたくさんあるのではないかと感じた私たちは、伝える側としてまだまだ未熟ではあるが、表現方法を試行錯誤しながら高松空襲をありのままに伝える発表をすることにした。

そしてこの夏休みには在校生を対象に「高松空襲について知る会」を実施した。そこではただ事実を述べるだけではなく、体験した人がその時もった感情、そしてそこに湧き上がった私たちの感情をのせて話すことに気を付けた。熱心に聞いてくれた生徒との話し合いの時間では、この発表で感じたこととして、「戦争や空襲の恐怖・むごさ・虚しさ」「平和な現在のありがたさ」「戦時下の人々の助け合いの心」「高松空襲を伝え続けていくことの大切さ」という声が挙がった。「伝承」は事実が伝わることだけではない。心が動き、行動が連鎖的に生まれること。今回はその体現の希望が見えつつあるような会になった。

準備が足りていない部分など改善点もあったが、「この会を実施できてよかった」と全員で喜びを共有した。

今度は高松高校という枠を超え、小中学生に伝えたり、ほかの高校との活発な交流をしたりできるよう、計画、準備を進めている。



「高松空襲について知る会」

5 【まとめ】

私たちは本校で、人道プログラムを始めてから沢山の経験をした。杉原夫妻やユダヤ人にゆかりのある土地に赴いた研修では、普段の学校生活では会うことのできない現地の高校生など、人との出会いや実際に現地に行くことで得られる新しい知識との出会いがあった。そのような中で人との繋がりをより大切に感じるようになった。実際にこれまでの研修でここまで「平和」に対する考えを多方面から深め、人としてあるべき姿を模索することができたのも多くの方々が私たちにお話をしてくださり、意見を交わしてくださったからである。研修で交流するたびに同じ熱い気持ちを持つ者同士の強い繋がりを感じている。また歴史を学ぶだけではなく計画や協調、失敗を通して自分で考えることの大切さを学ぶ機会も多かった。

小学生の時から高松空襲について聞いたことはあった。しかし、瓦町駅での展示でより詳細に知った『高松空襲』。あまりの壮絶さに驚愕したのと同時に、高校生になるまであまり知らなかったことを恥ずかしく思った。それから自主的に動き、学びを深めていく中で、戦争を過去のものとして封じ込むのではなく、これから戦争を起こさないよう次の世代へ実際にあった悲惨な歴史を伝えていくべきだと思った。

このような活動を通して、私たちが学び続けることが大切だと感じた。普段の生活の中でアンテナを張り、ニュースや新聞などから積極的に情報を得て、正しい知識を身につけ、自分の意見を持つことを大切にしていこうと思う。そして、学び続けることに留まらず、学んだことを「伝える」ということが何より重要であると実感した。他校との交流や、研修で訪れた場所で出会った人達に今まで行ってきたことを話し、伝えてこそ、一つの学びが達成されるのだと思う。

また、この探究活動はSDGsの『10 人や国の不平等をなくそう』や『16 平和と公正をすべての人に』の達成につながるに違いない。

私たちのアクションは傍から見れば限りなく小さいかもしれない。だがゼロではない。私たち自身の行動が「平和」への一歩となることを信じてこれからも活動していこうと思う。

今回の探究を通してお世話になったすべての方々に心より感謝を申し上げたい。

ありがとうございました。



6 【参考文献】

- ・山田純大,『命のビザを繋いだ男 小辻節三とユダヤ難民』, NHK 出版, 2013.
- ・杉原幸子,『白夜 - 歌集』, 大正出版, 1995.
- ・杉原幸子,『六千人の命のビザ』, 大正出版, 1993.
- ・ <https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/shinotorikumi/jinken/keihatsu/heiwa/index.html>

「高松市公式ホームページ」より